

学 位 論 文 要 旨

氏 名 松井幸太

題 目 高等学校の運動部活動における指導者の関わりと生徒の心理的成長

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

学校教育の一環である運動部活動は教育的活動であると同時に、競技スポーツとしての側面もあわせもち、競技力の向上や勝利の追及といった競技成績に対する期待も大きい活動である。そのため、運動部活動の指導者は、教育的な役割と競技的な役割を同時に求められることになるが、競技スポーツとしての意識が高まるほど、指導者はじっくりと育てる指導よりも早期に教え込む指導へと傾いてしまいがちになる。そうした指導環境の中で、生徒の自発性や独創性が育まれにくいことが指摘されている。

教育的期待や競技的期待の高まりとともに、多くの生徒が積極的に運動部活動へ参加しており、時に過剰なほどに運動部活動に専心することも少なくない。生徒の取り組みがオーバーコミットメント傾向を呈すと、身体的心理的負担の増大や家庭生活への影響、勉強や趣味との両立などさまざまな支障が生じうる。運動部活動に対する魅力ややりがいといった自分自身の欲求から活動に専心する面もあるが、一方では他者からの期待や願望などが関連し合い活動に影響を与えている側面もあると思われる。生徒本人の欲求よりも他者の欲求に大きく影響を受けているような場合には、生徒の内的な思いが抑圧され、不適応的な状態へとつながっていく。つまり、周囲の期待に応えることのみを優先し、自らの願望や欲求を抑制して活動に打ち込むという過剰適応状態が懸念される。

以上のような運動部活動の現状より、指導者の関わりと生徒の心理的課題を検討していくにあたって、生徒の運動部活動体験の質を左右する要因の一つである生徒と指導者の関係に着目して検討していくことが求められる。したがって本論文では、運動部活動における指導者の関わりと生徒の心理的成長について、生徒と指導者の関係に注目して検討を行った。

研究1（第3章）では、指導者の関わりと生徒の心理的側面との関連について検討していく際に、生徒と指導者の関係がより重要な要因となっていることを確認するため、運動部活動所属の高校生1071名を対象に質問紙調査を実施した。そして、生徒の内発的動機づけに対して、指導者のフィードバック行動、および生徒と指導者の関係が及ぼす影響について検証を行った。

結果より、第1に、生徒の内発的動機づけに対する指導者のフィードバック行動の影響は、生徒と指導者の関係によって異なり、懲罰的なフィードバック行動であっても、生徒と指導者の親和的信頼関係が築けている場合には、効果的に作用することが示された。第2に、生徒の内発的動機づけに対して、指導者がどのようなフィードバック行動をするかということよりも、生徒と指導者がどのような関係であるかということが大きな要因であることが示された。そして、生徒と指導者の親和的信頼関係を築くにあたって、指導者のフィードバック行動が影響を与えており、指導者の称賛励ましが多く、無視の少ない指導が効果的であるこ

とが示唆された。

研究1より、指導者の指導行動よりも、むしろ生徒と指導者の関係の在り方のほうが、生徒の心理的側面により大きな影響を与えていることが示された。そのため、研究2(第4章)および研究3(第5章)では、運動部活動所属の高校生978名を対象に質問紙調査を実施した。そして、生徒が認知する主観的な心的表象としての生徒と指導者の関係を捉えるため、指導者の関わりに対する生徒の認知を尋ねることによって生徒の認知する指導者像とした。つまり、指導者の受容的な関わりと統制的な関わりという2つの視点から生徒の認知する指導者像を捉え、それぞれの指導者像ごとに生徒の心理的特徴を調べた。その結果、生徒の認知する指導者像は、受容型、統制型、両高型、両低型の4つに分類できた。

研究2では、生徒の指導者に対する依存性について、生徒の認知する指導者像ごとにその特徴を検討した。結果より、受容型では、統合された依存性が比較的高く、依存欲求が低かったことから、指導者に対して過度に依存的になりすぎることなく、自己の判断基準をもちつつ、必要に応じて指導者に頼ることのできる自立的な依存の形態が示された。統制型では、統合された依存性は低く、依存欲求が高かったことから、いわゆる“依存的”で未熟な依存性が示された。両高型では、統合された依存性も依存欲求もともに高かったことから、指導者に対する未熟な依存性も、自立的な態度もあわせもつ依存の形態であった。両低型では、統合された依存性も依存欲求もともに低かったことから、指導者との関係が希薄であるがゆえに、自立の前提である依存的関係が課題となっていることが示された。

研究3では、運動部活動へのオーバーコミットメントと参加動機の自己決定性について、生徒の認知する指導者像ごとにその特徴を検討した。まず両高型の特徴として、自律的動機と他律的動機がともに高く、オーバーコミットメントも高かったことから、自らの興味関心により自律的に活動しているが、他者からの評価や期待がさらなる活動への動機づけとなっており、その取り組みはオーバーコミットメントとなっている可能性が高かった。反対に統制型と両低型では、自律的にも他律的にも参加動機が低く、オーバーコミットメントも低かった。最後に受容型では、自律的動機が両高型に次いで高く、他律的動機は低かったことから、他律的な動機ではなく自律的な動機により運動部活動に参加していると考えられる。そして、オーバーコミットメントは中庸であり、適応的な取り組みであった。

また本論文では、指導者の関わりと生徒の心理的側面について生徒と指導者の関係に着目して検討を行ったが、これらの要因の関連について生徒の属性からの比較も行った。つまり、性別や学年のみならず、生徒の競技水準(レギュラー・準レギュラー・非レギュラー)および部全体の競技水準(地区大会・都県大会・全国大会)、さらに競技種目(個人競技・集団競技)から、それぞれの属性における生徒の心理的特徴についてもまとめることができた。